

科学トレ NEWS LETTER

東京オリンピックを終えて ～そして次につなげるために～

2021 vol. 6

「東京オリンピックを終えて新種目の更なる活躍に期待したい！！」

R 3年度日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学スタッフ） 花岡 美智子

東京2020大会は新種目が目白押し、スケートボード・自転車BMXフリースタイル・バスケットボール3×3・スポーツクライミングなどの競技が採用され、数々のメダル獲得と白熱した応援は今も記憶に新しい。次期2024パリ大会、更に新種目が加えられブレイキンと呼ばれるブレイクダンスの採用が12月の国際オリンピック委員会（IOC）で決定された。が、東京五輪で金メダルを獲得した野球・ソフトボールや空手は消えてしまう。

新種目スポーツクライミング界を牽引する「女王」、東京2020銅メダリスト野口啓代選手は東京五輪を終えて、興奮と期待、不安・プレッシャーの日々を興味深く語っている。マイナースポーツからの脱却、しかし、クライミングの壁同様に今後の課題には終わりが無いという。自分の身体のみを使って登る競技、難易度、パターンなど大会毎に出される課題は異なり、競技人生で二度と出会えない課題、登れても登れなくても5分で終了する競技だという。今回の東京オリンピックも過酷なコースに果敢に挑んだが銅メダルに終わってしまったと。「いくら強くなっても、いくら苦手を克服しても登れない課題があり、終わりが無いものを追いかけている感覚」だともいう。しかし、やりがいがあり今でもまだまだ強くなれる、いつでも強くなれると信じて挑んで行けるスポーツであり醍醐味溢れる競技、そこに魅力を感じているようだ。今後期待することは、「クライミングの普及」という。まずは競技を知って観て感じてもらいたいと強く語っていた。



更に新種目スケートボードが大反響をもたらした。その要因は金メダルを獲得した堀米雄斗選手ら、若干10歳台の若手アスリート（スケーター）が表彰台を独占していたのである。成績ばかりではない。スケートボードのスリリングな戦い、成功も失敗も国を背負い挑戦する使命感、仲間を称賛するスピリット、競技の面白さを中継・解説したJOCナショナルコーチである早川大輔氏の迫力ある言葉が更なる盛り上げを図った。

早川コーチ自身もプロスケーター、スケートボードに熱い思いを抱き堀米雄斗選手にスケートボードの未来を託した、日本のこの世界を託した張本人であった。

堀米選手自身もスケートボードに対する姿勢は鋭く熱い。

「トリック（技）を習得する時は自分が納得するまでトライし続けます」との事、当たり前のことではあるが1日24時間の大半を費やすのである。特に、まだ乗れたことがない新しい技の場合は、「まずどうこけたらいいのか」と「どうしたら乗れるのか」をあらゆる状況を想定して攻めながら行うとのこと、果敢に挑む姿勢の裏にはいつも恐怖心との戦いがあると語っている。今回の東京五輪、攻め続けた結果が見えたそうである。オリンピック新種目としてまだまだ見知らぬ世界であるスケートボード、この競技の未来は明るく楽しいものと期待したい。



コロナ禍で相次ぐ混乱や緊急事態宣言の下、1年の延期を乗り越え無観客での開催に至った東京2020オリンピックではあったが、「多様性と調和」を掲げた大会の足跡は、史上最多の33競技339種目を懸命に戦い抜いたアスリートの素晴らしさ、逞しさは言葉に表せない感動で幕を閉じた。日本の史上最多の金メダルラッシュ、選手たちの夢にまっしぐらに進むいぢずな姿は人々の心を豊かにし、夢や希望の火をともしたに違いない。

スポーツの計り知れない魅力、スポーツの力、スポーツの素晴らしさに今後も期待して止まない！！